

音楽する身体をつくる

1 研究の内容

(1) 「音楽する」「てつがくする」身体

音楽は、まさに身体を駆使して営まれる行為であり、音と身体、身体と身体が共鳴・共振しあって生みだされる。「音楽する身体」とは、「面白そう!」、「へえ!そういうのもあるんだ!」など他者と「同じところ」や「違うところ」を感じたり、作品や楽器そのものと共振したりして、情動が揺れ動き、新たな活動に参加していく身体である。ポジティブな体験を積み重ねる中で、子どもたちは自己肯定感を高め、仲間と相互作用し、ともに成長していく。多様な音楽様式や、自分と異なるミュージッキングを楽しむ姿に触れることは、自らを問い直すきっかけとなる。そこで悩んだり迷ったりしながら、自分の意思で、新たな行動をおこす。その思考過程が「てつがくすること」につながるのではないかと考え、日々実践している。今年度も昨年に続き、子どもが、人や音、作品や楽器と対話し、そこで生まれる問いから、どのような表現や姿が生まれるかをみつめてきた。教師も子どもと同じ世界から音楽と向き合い、ともにその世界を楽しむことも心がけた。さらには、思考を言語化、視覚化することで、教師自身も内と外から見つめ直した。

本校では、音楽を「ミュージッキング（音楽する行為・活動）¹⁾」（Cスモール）だと捉えている。これは、作品の再現だけではなく、「聴く・踊る・演奏会を企画する」など、音と関わりあうすべての活動が音楽であり、他者と関わり社会とつながる積極的な行為だとする考え方である。我々は、このような立場にたち、多様な音楽に出会う機会を増やし、そこに存在する異なる文化的価値や他者の思考、わざと出会い、自らの情動をゆり動かし、新たな表現行動にむかうような学習内容・方法を、長年試みてきた。そもそも、音楽（音）は社会の文脈の中で息づき、時代や地域・社会背景とそこに生きる人々とつながって、独自の意味をもつ。音楽の好みは一人ひとり異なるのが当然であり、どのような音楽表現も尊重することが大切であると考え。ならば、作品として表れた「結果」でなく、刻一刻と生じつつある「探求の過程」が重要であり²⁾、カリキュラムもそこを意識して編成している。

(2) 本校のカリキュラムの特徴

上記の理由から、本校では、常時活動として、低学年での「リクエストによる歌唱」や、4年生以上の「ミュージックプランに基づく学習」など、自ら選び、他者と関わって学びあう活動を常時活動のひとつとして位置づけている。教師が教え込むよりも時間はかかり、整然とはしていないが、子どもが自ら思考・判断し、人やモノ、作品と応答し、自分の世界を積極的に広げていることを実感している。また、6年間を通して、伝統音楽に触れることも継続的に行っている。

このような授業の積み重ねでみえてきたのは、子ども同士の関係が固定的でなく、他者との関わりの中で常に流動的に変化していることである。たとえば、ミュージックプランに基づく学習では、ある目的をもった仲間が結ばれ、発表を終えるとほどけ、新たな目的を持つ集団へ参加していく。一人ひとりが、「演奏者」「聴き手」「批評家」の立場で、自分も含めた他者に、常に働きかける存在となり、集団の一員として仕事を果たすのである。また、伝統音楽の授業では、新たな楽器と対話し、意外な子が魅せられたように夢中になって演奏する姿がしばしばみられる。子ども一人ひとりが、何らかの立場で居場所があり、上下関係の固定しない空間で他者と身体を委ね合って学びあう。それは、他者だけでなく自分への充足感をもたらすケアの教育でもあり、「てつがくする」ことにつながると考える。さらに教室を超え、授業を縦にも横にも広げた表現の場が、ミニコンサートや全校音楽会なのである。

自分で選び、他者と関わって広げ、高める日常の授業

- ・リクエストによる歌唱 わらべうた遊び
- ・ミュージックプランに基づく学習
- ・さまざまな伝統楽器に触れる
(和太鼓、お囃子、箏、雅楽、ガムランなど)

関わりを縦横に広げる

- ・ミニコンサート
- ・専門家とのワークショップ

協働して創り上げ、

- 聴衆を意識して伝える
- ・全校音楽会

2 授業実践からみた子どもたちの学ぶ姿

(1) からだまるごとで楽しむ ～わらべうたあそび・リクエストによる歌唱活動、1年生の事例～

わらべうたあそびでは、からだまるごとで遊ぶことを大切にしている。わらべうたあそびには、あそびそのものの中に音楽的な要素だけでなく、社会的な要素が含まれている。子どもたちは、声や息を互いに感じて遊ぶ。教室だけでなく、屋上や校庭も授業空間である。活動の中では様々な表情がうまれる。葛藤しながらも、他者と関わって楽しもうとする姿があり、やがて即興的に生まれた作品が、新たなわらべうたとして子どもに定着する場合もある。また、活動を繰り返す中で折りあいをつけることも学んでいく。他者との関わりの中でつぶやきがうまれ、自らを表現しようとする姿勢も育まれる。あそびを体験する中で、安心して他者との距離を近づけ、つながる身体になっていく。

もぐらどんは、数人で輪になり、人を当てるあそびである。どのあそびにもルールは存在する。輪を乱したり、ルールを守れなかったりと、毎回トラブルは起きる。その中で、子どもたちは子どもたちなりによりよいあそびにしようとする。子どもの世界は一つの社会であり、仲間とともに、わらべうたあそびを続けようとする中にも、寛容やケアといった価値内容を含む「てつがくする」子どもの姿がみられた。

C1 「もーぐらどーぞ！」
♪もぐらどんのおやどかね・・・・・・・・
輪の中の子の後ろの人が起こす役割だが、びたっと決まらない。すると、
C2 「○○ちゃんだよ！」
C 「あー！言っちゃった。」
C2は、すねて輪から外れ、あそびがとまる。
C4 「ねー、大丈夫だよ！もう一度やり直せばいいじゃん！」
C2 「だってさ、みんなで言わなくても。」
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
しばらく経って、C2も輪に戻る事ができた。

リクエストによる歌唱活動は、毎時間1グループ（4人）ずつ、歌集の中から自分で選び、それを仲間に表示することができる公共空間がある。選ぶ者と、それを聴き、ともに歌う者との間に柔らかな空間がうまれる。曲への関心は、同時に個への関心ともつながっている。このような応答を重ねる中で、歌う心地よさや、その子らしさを感じている。

子どもたちには、毎回驚かされる。リクエストした子には、必ずどうして選んだのかを聞いているが、選んだ理由とその子をセットにして、身体の中に蓄積している姿が多い。教師は忘れてしまっているような細かなことでも鮮明に覚えている。リクエストによる歌唱活動からは、個々の背景も感じ取ることができる。お母さんと一緒に歌って、いい曲だなと思った。テレビで流れていて好きになった。この曲のここだけがすき、等々、選ぶ観点はその子らしさなのである。このような営みを繰り返すことで、表出できる安心感や、聴く身体が育つと捉えている。

(2) 夢中になる ～4年生の事例～

〈あこがれをきっかけに〉

N男は、自身の兄が音楽会でスターウォーズのテーマ曲を演奏したことから、「自分もスターウォーズのテーマ曲をやりたい！」と思い続け、4年生から始まる「ミュージックプラン」を楽しみに待っていた。4月、彼の挑戦はソプラノリコーダーから始まった。その曲の中には、まだ授業では取り扱っていない音もあったが、彼は自分で吹きながら音を見つけ出し、練習を重ねて発表し、そして拍手喝采を受けた。彼は満面の笑みを浮かべた。彼の挑戦はそこでは終わらず、次にキーボードで同じ曲に挑んだ。彼はどの音色が一番その曲に合っているのが、試行錯誤しながら、トランペットの音でみんなの前で演奏をした。それを聴いたクラスの反応は賛否両論であったが、友だちの感想もうん、うんと頷きながら聞いた上で、「でも僕はこれがいいと思う」と強く言い放った。そして「それならもっと強弱をつけたらいいよ」などのアドバイスもうまれ、自分の異なる感じ方であったとしても、互いに認め合い、受け止めている姿をみることができる。そして、彼がまたみんなの前に立つと「またスターウォーズ？」と目を輝かせ、聴く側も毎回パワーアップしていく彼らの演奏を楽しみにしている。また、そのこだわり続ける姿に刺激を受けたひとりのクラスメートが「ぼくがマリンバでやってみるから一緒にやろう」と声をかけ、たちまち彼らはスターウォーズ軍団になり、今も挑戦し続けている。兄のように演奏したい、という少し高い目標があることで、技術の向上にもつながる。また、その頑張りをお認めてくれる仲間がいる

ことによってその意欲はさらに高まり、目標に向かって努力している姿に周囲も触発され、互いに高め合っている。

〈トーンチャイムの響きを生かす〜〉

H男たちもまた、自分のこだわりを持ち続けた子どもである。4年生になり、ミュージックプランに基づく学習が始めると、今まで教師が使うときしか触ることができなかったトーンチャイムも自由に触れることができるようになった。H男をはじめとするこのグループは1学期当初から現在に至るまで、トーンチャイムの魅力に惹きつけられ、演奏を続けている。このグループは、同じ曲を何度もみんなの前で披露し、練習の成果を発表している。聴いている側も、はじめは「〇男くんの音が間違っていた」「その音は違う音だよ」など、完璧に楽譜通りに演奏することに気を取られていたが、回数を増すごとに「〇男くんの音の出し方がよかった」「もっとこうした方が響くんじゃないかな」など、音そのものの響きに注目できるようになり、また、演奏したグループだけではなく、学級全体でトーンチャイムの音の響かせ方について考える時間もできるようになった。彼らがトーンチャイムの響きにこだわることで、周りも音の響きに耳を傾けるようになった。ひとりが実際に経験できるものや時間は限られているが、このように表現の場を通して共有することで、またひとつ、個々の音楽の世界に広がりを持たせることができるのである。

N男、H男をはじめとする多くの4年生は、夢中になって音楽にどっぷりと浸かっている。彼らがこだわりを持ち続け、練習を続けている元になっているものは、なによりも「好きだ」という気持ちなのではないだろうか。またその気持ちを周りも受け止めることができる関係をつくることによって、生き生きと、そして思いっきり自分の音楽の世界に浸ることができるのである。

（3）自己と見つめ合う時間 ～5年の事例～

4月5日、H男はミュージックプランの時間になると、決まってアッセンブリの隅っこでマレットを巻いていた。彼に、「なにかやりたい曲はない？」と聞くと、「あるけど、リコーダーの指使いがわからないんだもん」と泣きそうな顔を見せた。その一言は、今まで自分の中でのもやもやしていたことを、外に解放できた瞬間であった。そこで、彼にゴジラの曲のリコーダーの特別プリントをつくることにした。なぜゴジラにしたかという、授業中の子どもたちの発表のときにゴジラの曲が流れると、彼は顔をあげて友だちの演奏を聴いていたからである。そのプリントには、音名、運指をかいいておき、「これ、一緒にやってみない？」と渡すと、彼は無言で自分の音楽ファイルに入れたため、だめだったかなあ・・・と思ったが、見守ることにした。しかし、次の音楽の時間、彼はいつもマレットを巻いているお気に入りの場所で、ゴジラの曲と向き合って練習をしていた。そこから、彼は人が違うかのように練習に没頭した。そしてゴジラの曲を完成させると、「またプリントちょうだい」と私のところへ来たのである。今では「練習しなきゃ」という独り言を言いながら、アッセンブリに入ってきては、自分で楽譜を見



つけ、運指を書き込み、わからないことは教員や友だちに聴き、ひたむきにリコーダーと向き合い続けている。また、友だちも彼を受け入れ、聞かれたことには素直に応じ、また少し離れたところから見守っている。彼にとって、そのほどよい距離感こそ、居心地のよい、安心できる空間である。

彼はミュージックプランの時間において自己の課題と真摯に向き合っている。彼にとってこの時間はまさに自己と対話する時間なのであ

る。

（4）様々な音楽文化に触れ、自らの音楽を追求する ～6年の事例～

これまで「越天楽」では鑑賞と唱歌、竜笛や箏箏に触れるという学習を行ってきた。昨年度に続き、全員にストロー舌を全員に持たせてみたところ、「唇がぶるぶる震える」「息が持たない」「すげー」など、実感のこもった言葉を発し、教室や廊下でもチャレンジする姿が見られた。息の使い方や力の入れ方が身体に入ると、今度は音高にこだわりはじめ、唇と息を調節しながら楽しむ姿があった。

また、夏休みの宿題である「伝統楽器新聞づくり」を通して、子どもたちは、実に多様な伝統楽器について調べたり、体験したりしていた。実際に演奏体験した子もいれば、伝統音楽に関係した本や新聞から学んだり、実際に専門家の元で体験したりした子もいた。子どもの興味の入り口は多様で、注目した点も異なる。その後全員の新聞を読み合う機会を設けると、異なる楽器や視点で書かれた作品を各々が興味深そうに読んでいた。また、新聞には、楽器の歴史と社会事情を考察したものあれば、素材に着目し、調べていくものもあった。一人ひとりが楽器を通して文化や社会について考えていることがよくみえた。これも「てつがくする」姿のひとつといえよう。

3 今後に向けて

音楽（音）には喜びや興奮をもたらす力があり、古くから宗教や政治にも用いられてきた。その力は大きく、私たちの身体を揺さぶり、内面に深く浸透していく。私たちの身体はある意味、生々しくて脆さを抱えている。だからこそ、身体と音楽が響き合ひ、一体感をもたらす喜びの経験はもちろん、異なる音楽表現を味わい、批評し、自らを問い直す営みを続けることは、まさに「てつがくすること」である。一人ひとりの個性的な表現を味わい、「私」と「あなた」がともに響き合う。異なりを味わいながら、身体が音楽する。

他者と関わり、多様な声（音楽）が混じり合い、必然性のあるテキストとなること。活動の過程が実感を持ったものであり、協働的であり、自律的であることが重要であろう。

また、子どもたちの興味は個人にとどまらない。教室の中では、自らがその活動を行わなくても常に周辺的に他者の興味を身体で受けとめている。個人の興味は異なる興味に基づいた表現と行き交い、複合し触発しあっているのだ。30人が30通りの選択で音楽に向かい、一人ひとりがそれを楽しんでいる姿に触発されて、表現が広がり深まっていく。自ら選び、工夫して新たに再生産するという行為は、自分の内部に他者を取り入れる公共空間をつくることであり、そこで異なる他者との応答・すり合わせ・響きあいを経て、新たな私の表現をうみだすダイアログな学びといえよう。

一方、子どもだけではなかなか出会うことのない世界へつなぐことは、教師の役割である。教師は専門家の立場で子どもをつなぐと同時に、「よき聴き手」「よき学び手」として、子どもと水平な立場に身を置き、その世界を味わい、楽しんでいきたい。

（下田 町田）

参考文献

- 徳丸吉彦『ミュージックスとの付き合い方』2016, 左右社
中村美亜、『音楽をひらく』アート・ケア・文化のトリロジー-2013 水声社
山田陽一編『音楽する身体』2008 昭和堂, ユーリア

¹クリストファー・スモール、野澤豊一、西島千尋訳『ミュージッキング』水声社、2011

²山田陽一編『音楽する身体』,2008 昭和堂、p2